

# 澄観と密教——『大方廣佛華嚴經疏』に見られる密教的要素——

遠藤純一郎

## 序言

清涼国師澄観は、第三祖賢首大師法蔵に次ぐ第四祖と称されている。彼は慧苑の弟子である法説のもとで華嚴の教義を学んでいたようであるが、慧苑は法蔵の直接の弟子であるにもかかわらず、彼の理解は師の真意を曲げるものと退け、自らが法蔵の正当な後継者と自認している。しかしながら、具に澄観の著作を眺めてみると、彼は必ずしも単なる法蔵の後継者の役割を演じているわけではなく、寧ろ極めて彼に独自の教学を展開している様子が伺えるのである。

中国に於ける華嚴宗（賢首宗と言う方が適當であろうが）の思想的展開については、禪宗との融合を中心に取り上げた論究を多く目にするのであるが、澄観の教学に関しても、禪を睨んだ言及が多く、その他三論や天台、或いは浄土教などとの関係を指摘する程度に大凡限られていたかのように思われる。しかし、密教と澄観との関係については、纔に松永有見氏<sup>(1)</sup>・加藤精一氏<sup>(2)</sup>らが概観されておられるのみで、これまで殆ど顧慮されてこなかった感が強い。このことはなにも、この両者の関係性が、単に密教研究の領域から補足的に参

照されるべきというだけの問題だということでは全くなく、澄観在世時に密教が隆盛していた事実を鑑みるなら、寧ろ澄観の華嚴思想を理解する上でも不可避な検討課題と言わねばならないはずである。これに対して十分な評価を与えぬまま、澄観自身や彼の思想に言及するなら、その本来の姿を歪めてしまう危険性を常に孕むことになるだろう。

そこで本論では、先ず澄観の最初期の著作に相当する『大方廣佛華嚴經疏』（以下『華嚴經疏』）に注目し、そこに引用される密教典籍に逐一検討を加えてゆくことにする。このことにより、両者の関係性の一端を闡明することになる。勿論『華嚴經疏』を十全に理解するためには、『大方廣佛華嚴經隨疏演義鈔』を併せて参照すべきではあるが、紙幅の都合上、それについては改めて別稿を設けるとして、ここでは『華嚴經疏』に絞って論じることにした。

## 本論

『華嚴經疏』には「二生成辨」であるとか「三密」といった、密教的にも解釈しうるような術語がいくつか散見される。本論では、最も客観的な事実として、且つ最も顕著な事例として、經典名を明示して引用がなされている箇所を示し、『華嚴經疏』に於ける最も確実な密教的要素として指摘したい。このように彼の引用した密教典籍の傾向を明瞭にすることにより、彼が何系の密教に親しいのかが明らかになる。先の密教的用語の検討については、本論での成果を踏まえ、後の機会に改めて考察することにした。

さて『華嚴經疏』に引用される密教典籍であるが、管見の及ぶ範囲で言うならば、次の六種が認められる。

A 『大毘盧遮那成佛神變加持經』

B 『大毘盧遮那成佛神變加持經疏』

C 『金剛頂瑜伽理趣般若經』

D 『瑜伽金剛頂經釋字母品』

E 『金剛頂超勝三界經說文殊五字眞言勝相』

F 『大方廣佛華嚴經入法界品四十二字觀門』

これより以下、順次これらについて検討してみることになろう。

#### A 『大毘盧遮那成佛神變加持經』の用例

『華嚴經疏』に引用される『大毘盧遮那成佛神變加持經』（以下『大日經』）は以下の四例が見受けられる。

a 毘盧遮那經第六云、有四根本罪、乃至活命、亦不應犯。謂一謗法。二捨菩提心。三慳吝。四惱害衆生。<sup>(3)</sup>

これは、入法界品中の善住比丘の箇所に於ける「第四謙己推勝」（自分を謙り、より勝れた菩薩を紹介する節）に示されている。そこでは、善住比丘が自らは「普速疾供養諸佛成就衆生無礙解脫門」を知るのみで、自分より勝れた諸菩薩の持する「大悲戒・波羅蜜戒・大乘戒・菩薩道相應戒・無障礙戒・不退墮戒・不捨菩提心戒・常以佛法爲所緣戒・於一切智常作意戒・如虛空戒・一切世間無所依戒・無失戒・無損戒・無缺戒・無雜戒・無濁戒・無悔戒・清淨戒・離塵戒・離垢戒」は知ることが無いとし、次に訪れるべき善友として「彌伽」を指示している。澄観は、上掲の諸戒の内「不捨菩提心戒」と「常以佛法爲所緣戒」はそれぞれ『大日經』で言う「一謗法。二捨菩提心。」に関わる戒であり、「無損戒」と「無濁戒」は「三慳吝。四惱害衆生。」に対応するものと解釈している。『大日經』の本文でも「菩薩受持如所說善戒。應具諦信當勤修學。隨順往昔

諸如來學處、住有爲戒、具足智慧方便、得至如來無上吉祥無爲戒蘊。有四種根本罪、乃至活命因緣。亦不應犯。云何爲四。謂謗諸法。捨離菩提心。慳吝。惱害衆生。所以者何。此性是染。非持菩薩戒。<sup>(4)</sup> と言っており、引用に際して多少澄觀の手が加わっている痕跡が認められ、『大日經』の本文を全く正確に引用しているとは言えないが、文意を大きくゆがめるようなことはしていない。

b 今更依毘盧遮那經第五、別有字輪品。彼經云、是遍一切處法門。謂菩薩若住此字輪法門、始從初發妙菩提心、乃至成佛、於是中間、所有一切自利利他種種事業皆得成就。<sup>(5)</sup>

これは、入法界品中の生貴住の箇所<sup>(6)</sup>に於ける「第二授已法門」に示されている。この生貴住にて弥伽は善財に「輪字品莊嚴法門」を授けているが、この法門を巡っての解釈に以上の一文が引用されている。澄觀は法藏の解釈を紹介し、一応にその説を支持しながら、併せて『大日經』の字輪品を挙げ、従来の華嚴教学とは異なる新機軸を打ちだそうとしている。

『大日經』の当該箇所では「諦聽祕密主。有遍一切處法門。祕密主若菩薩住此字門。一切事業皆悉成就。」<sup>(6)</sup> と言っており、上掲の文中で『大日經』の引用箇所としては纔に「是遍一切處法門」の部分が認められる程度ということになるが、『大毘盧遮那成佛神變加持經疏』(以下『大日經疏』)では「有法門名遍一切處。彼菩薩字位住時。一切所作皆得成就者。即此字輪法門。是遍一切處法門也。菩薩若住此字輪法門者。始從發妙菩提心。乃至成佛。於是中間所有一切自利利他種種事業。由入此法門故。一切皆得成就。」<sup>(7)</sup>とあり、『華嚴經疏』で言う「彼經云」以下は寧ろ『大日經疏』からの引用として見たほうが宜しい。

c 列有四十二門。皆言般若波羅蜜門者、從字入於無相智故、字義爲門故。毘盧遮那經中皆言不可得。智

無所得即般若故。<sup>(8)</sup>

これは先のbと同じく字輪解釈の場面にて言われているものであるが、その中でも四十二字門の字義解釈に関して『大日經』が紹介されている箇所である。ここでは直接本文を引用しておらず、『大日經』の該当箇所を読者の側が判定せねばならない。恐らくは入漫荼羅具緣眞言品で「謂阿字門一切諸法本不生故。迦字門一切諸法離作業故。佉字門一切諸法等虛空不可得故。哦字門一切諸法一切行不可得故。伽（重聲）字門一切諸法一合不可得故。遮字門一切諸法離一切遷變故。車字門一切諸法影像不可得故。若字門一切諸法生不可得故。社字門一切諸法戰敵不可得故。吒字門一切諸法慢不可得故。咤字門一切諸法長養不可得故。拏字門一切諸法怨對不可得故。荼（重聲）字門一切諸法執持不可得故。多字門一切諸法如如不可得故。他字門一切諸法住處不可得故。娜字門一切諸法施不可得故。駄（重聲）字門一切諸法法界不可得故。波字門一切諸法第一義諦不可得故。頗字門一切諸法不堅如聚沫故。麼字門一切諸法縛不可得故。婆字門一切諸法一切有不可得故。野字門一切諸法一切乘不可得故。囉字門一切諸法離一切諸塵染故。邏字門一切諸法一切相不可得故。縛字門一切諸法語言道斷故。奢字門一切諸法本性寂故。沙字門一切諸法性鈍故。娑字門一切諸法一切諦不可得故。訶字門一切諸法因不可得故。」<sup>(9)</sup>とする箇所を指示しているものと考えられる。但しここでは「阿字門」乃至「訶字門」までの二十九字門しか示されておらず、直ちに『華嚴經』の四十二字門と対応するものではなく、また澄観の言と異なり「阿字門」と「迦字門」には「不可得」が付されていない。しかし彼は、『華嚴經』中で四十二字門それぞれにて「般若波羅蜜門」と言っていることを「字より無相智に入るが故に」、そして「字義を（無相智に入る）門とするが故に」と解釈し、『大日經』で言われる「不可得」とは「智無所得」ということであり、それは「般若」のことであるとして、『華嚴經』と『大日經』を結びつけようと試みているのである。

d 遮那經中字義與此無殊。<sup>(10)</sup>

これも先のcと同じく四十二字門解釈に際して述べられている一文である。ここで言う「字義」とは、四十二字門中の最初の五字門である阿字門・多字門・波字門・遮字門・娜字門についてのことである。<sup>(11)</sup>つまり、これらの字門の字義が『華嚴經』と『大日經』で全く同じだと言うのである。それでは、果たして澄観の言うように両者は一致するものなのであろうか。『華嚴經疏』<sup>(12)</sup>の五字門とそれに対応する『大日經』<sup>(13)</sup>の字門をつきあわせると、次のような表(表1)に示すことができる。『華嚴經』と『大日經』の本文を直ちに見比べてみても、各々が内容的に対応しているようには必ずしも見えない。しかし『華嚴經疏』<sup>(14)</sup>を媒介にして両者を見ると、そこに連続性が生じてくる。つまり、澄観は相当に両者の会通に努めたということになる。しかし「者字」及び「娜字」については、『華嚴經疏』を睨みながら両者を対比し

| 『華嚴經』                    | 『華嚴經疏』                                              | 『大日經』            |
|--------------------------|-----------------------------------------------------|------------------|
| 唱阿字時、入般若波羅蜜門名以菩薩威力入無差別境界 | 一阿者是無生義。以無生之理、統該萬法故。經云、無差別境而菩薩得此無生。則能達諸法空斷一切障、故云威力。 | 阿字門一切諸法本不生故。     |
| 唱多字時、入般若波羅蜜門名無邊差別門       | 二多者【中略】毘盧遮那經釋多云如如解脫、金剛頂云如如不可得故、謂如即無邊差別故、如不可得。       | 多字門一切諸法如如不可得故。   |
| 唱波字時、入般若波羅蜜門名普照法界        | 三波者、五字經云、亦無第一義諦、諸法平等。謂眞俗雙亡是眞法界。諸法皆等即是普照。            | 波字門一切諸法第一義諦不可得故。 |
| 唱者字時、入般若波羅蜜門名普輪斷差別       | 四者者、諸法無有諸行。謂諸行既空故、遍摧差別。                             | 遮字門一切諸法離一切遷變故。   |
| 唱那字時、入般若波羅蜜門名得無依無上       | 五那者、諸法無有性相、言說文字皆不可得。謂性相雙亡故無所依。能所詮亡是謂無上。             | 娜字門一切諸法施不可得故。    |

表1

ても、明瞭に内容的な一致を読み取ることはできない。そこで『大日經疏』を参照すると、そこでは「遮字」について「遮字門一切諸法離一切遷變故。梵云遮庖（二合）底即是遷變義。又梵音遮唎耶是諸行義。如見遮時、即知諸行遷變不住。」<sup>(15)</sup> と言ひ、「娜字」については「娜字門一切諸法施不可得故者。梵云檀那是捨施義。若見娜字、即知一切諸法皆是可捨相。」<sup>(16)</sup> と言つており、『大日經疏』は『華嚴經疏』と『大日經』の間に存した隔たりを解消することができる。このことから、また下の如く『大日經疏』からの引用がなされていることから明かなように、『大日經疏』に即して『大日經』を理解しようとする姿がそこより看取されるのである。

## B 『大毘盧遮那成佛神變加持經疏』の用例

『大日經疏』の引用例は以下の二つが見いだされる。

a 今云多者、毘盧遮那經釋多云如如解脫。<sup>(17)</sup>

これは四十二字門中の多字に関する解釈である。「毘盧遮那經釋多云如如解脫。」の一文は、「毘盧遮那經は多を釋して如如解脫と云へり」と読むべきか、「毘盧遮那經釋では多を如如解脫と云へり」と読むべきかはつきりしない。『大日經』の本文では「多字門一切諸法如如不可得故」<sup>(18)</sup> と言うのみで「如如解脫」とは言つておらず、それに対して『大日經疏』では「多字是一切法如如解脫不可得義。」と言ひ、このことから「毘盧遮那經釋」を一語として、『大日經疏』を指示しているものと理解するのが宜しいようである。

この多字の解釈の内容については、前掲の表1を参照されたい。

b 是遍一切處法門。謂菩薩若住此字輪法門、始從初發妙菩提心乃至成佛、於是中間所有一切自利利他種

種事業、皆得成就。如是初阿（上）字即是菩提之心。若觀此字而與相應、即同毘盧遮那法身之體。謂此阿（上）字輪、猶如孔雀尾輪光明圍繞。行者而住其中、即是住於佛位。又阿（平聲長呼）娑嚩三字總攝三部。阿字如來部。娑字蓮華部。嚩字金剛部。隨一部中皆有五字。所謂字輪者、從此輪轉而生諸字。輪是生義。如從阿菩提字即轉生四字。謂一阿字（上聲長呼）是修行輪、既已發心必修諸行。二閼字是成菩提輪、既修行已必證菩提。三嚩字是大寂滅涅槃輪。即菩提所至。四惡字（長呼）是方便輪。而阿字當中四字繞之。從下次第右旋亦如輪相。舉一爲例、餘字準之。若行者如是了達、則能入陀羅尼門。旋轉無礙故名字輪品。<sup>19)</sup>

これは先の『大日經』引用例bに続いて引用された一文である。既に指摘したように、『大日經』引用例bは寧ろ『大日經疏』からの引用として判じるべきものであるが、『華嚴經疏』で「彼經云」と言っているため、これまで一応に『大日經』からの引用として分類しておいた。しかし實質上は『大日經疏』の文章として取り扱うべきものであるので、ここで再び先の「彼經云」以下の文を挙げ、それに続く文章と共に『大日經疏』からの引用として取り扱うことにする。

さて、上掲の一文はひとまとまりの文章として示されているのであるが、『大日經疏』を参照すると、その文章は六つの部分に分かれている。『華嚴經疏』の引用と『大日經疏』<sup>20)</sup>本文を対応させると、以下のような表（表2）に示すことができる。

表2の如く『華嚴經疏』と『大日經疏』を対比してみると、b1、b4及びb6については、文章に多少手が加わっているものの、ほぼ正確に引用されている様子が見て取れる。但しb5の文章は、全く『大日經疏』の本文には見当たらない。b5の前後は『大日經疏』からの引用であるから、恐らくはb5の文章も同様に『大日經疏』からの引用という体裁を意図的に取った一文のようにも見える。しかし澄観が『大日經疏』

## 澄観と密教（遠藤）

表 2

|    | 『華嚴經疏』                                                                                                   | 『大日經疏』                                                                  |
|----|----------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------|
| b1 | 是遍一切處法門。謂菩薩若住此字輪法門、始從初發妙菩提心乃至成佛、於是中間所有一切自利利他種種事業、皆得成就。                                                   | 是遍一切處法門也。菩薩若住此字輪法門者、始從發妙菩提心乃至成佛、於是中間所有一切自利利他種種事業、由入此法門故、一切皆得成就。         |
| b2 | 如是初阿(上)字即是菩提之心。若觀此字而與相應、即同毘盧遮那法身之體。謂此阿(上)字輪、猶如孔雀尾輪光明圍繞。行者而住其中、即是住於佛位。                                    | 最初阿字即是菩提之心。若觀此字而與相應、即是同於毘盧遮那法身之體也。謂觀此阿字之輪、猶如孔雀尾輪光明圍繞。行者而住其中、即是住於佛位也(更問) |
| b3 | 又阿(平聲長呼)娑嚩三字總攝三部。阿字如來部。娑字蓮華部。嚩字金剛部。隨一部中皆有五字。                                                             | 謂阿字娑字嚩字。即此三字顯三部義也。阿字是如來部。娑字是蓮華部。嚩字是金剛部。每三部隨五字輪而轉。                       |
| b4 | 所謂字輪者、從此輪轉而生諸字。輪是生義。如從阿菩提字即轉生四字。謂一阿字(上聲長呼)是修行輪、既已發心必修諸行。二闇字是成菩提輪、既修行已必證菩提。三嚩鄉字是大寂滅涅槃輪。即菩提所至。四惡字(長呼)是方便輪。 | 所謂字輪者、從此輪轉而生諸字也。輪是生義。如從阿字一字即來生四字。謂阿是菩提心。阿(長)是行。暗是成菩提。嚩是大寂涅槃。嚩(長)是方便。    |
| b5 | 而阿字當中四字繞之。從下次第右旋亦如輪相。舉一爲例、餘字準之。                                                                          | 記載なし                                                                    |
| b6 | 若行者如是了達、則能入陀羅尼門。旋轉無礙故名字輪品。                                                                               | 若行者如是了達、即能入一切陀羅尼義。旋轉無礙、故名爲字輪也                                           |

の文章を捏造するメリットも取り立てて見当たらないし、或いは澄観が註釈的に挿入したものと見做すのが宜しいのだろう。

b5は阿字より阿(長声)字・暗字・嚩字・惡字(長呼)が生じる様子、所謂五轉阿字について述べたものである。

b5の説によれば、阿字が中心に在り、その下から順に阿(長声)字・暗字・嚩字・惡字(長呼)が右回りに九十度間隔で阿字を取り巻くように配列するとしている。『大日經疏』では単に「阿字一字即來生四字」と言うのみで、それぞれの文字が何処に配置されるべきか明示しておらず、澄観の

言うb5は『大日經疏』より一步踏み込んだ内容となっている。

ところで、この五転阿字の具体的な配列は『秘藏記』に初出すると言われている。

『秘藏記』は古来よりその作者について議論が有る。例えば杲宝の『秘藏記私本鈔』などを参照してみると、『深賢法印鈔』云、此書作者有兩説。一不空説慧果記。云々。一慧果説大師記。云々。<sup>(21)</sup>と述べ、『秘藏記』の作者に関して二説を挙げている。一つには不空が口述して恵果が記録したとする説、二つには恵果が口述して空海が記録したとする説である。杲宝は文証と理証という二つの観点から考察をすすめる、最終的に前者の説を退けている。東密ではこの後者の説が伝統的に支持されたのであるが、それに対して台密では不空の口説・恵果の記とされていたようである。<sup>(22)</sup>何れにせよ、伝統的には『秘藏記』は某かの密教の祖師の手になる書であるとの解釈が取られてきたということである。しかし、明治時代になると、加藤精神氏によりこの伝統的な説に対する疑義が呈され、また大村西涯氏は『密教發達志』にて、『秘藏記』は大唐青竜寺義操阿闍梨付法の弟子・文秘の作であると判じるなど、伝統的な説に対して否定的な見解が示された。今日も複数の学者により、その成立に関して考察がなされており、従来の伝統的な説は完全に否定された。しかし、その作者については未だに特定されておらず、成立年代についても議論が有る。一つには九八七年以後次第に増広されたという説(向井隆健説)、<sup>(23)</sup>二つには八七八年から八九八年、下がっても九一〇年の成立とする説(大沢聖寛説)、<sup>(24)</sup>三つにはおおよそ九〇〇年ころの成立とする説(甲田宥畔説)、<sup>(25)</sup>四つには八三九年から九〇六年の間の成立とする説(米田弘仁説)<sup>(26)</sup>が有り、一定していない。筆者は『秘藏記』の成立に関して言及する立場に無く、何れの説を積極的に支持すべきか、甚だ明瞭ではないのであるが、これまでの諸氏の研究の成果を踏まえるならば、『秘藏記』は既に八〇〇年代後半には日本に存在した可能性が濃厚であるとの予測に立つことができよう。

## 澄観と密教（遠藤）

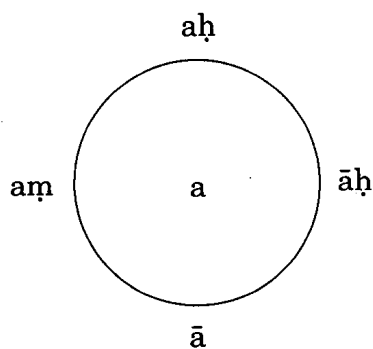


図 1

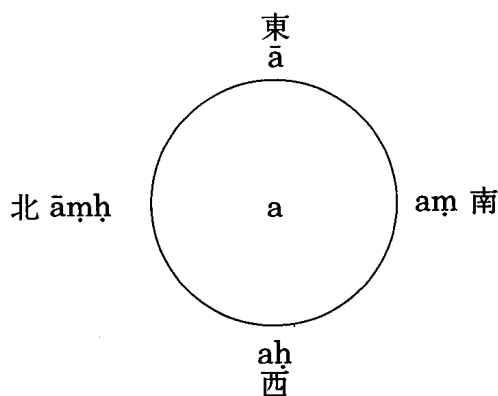


図 2

『祕藏記』はこのように極めて出自の怪しい典籍なのであるが、本論のテーマに於て非常に興味を惹かれるのは、五転阿字の配列は『秘藏記』に初出すると言われ、且つ澄観の言う配列に類似しているためである。

澄観の言に従えば、五転阿字の配列は図1の如くなる。

一方、『祕藏記』に示された五転阿字の配列は図2の如くである。

両図を子細に見比べてみると、その相似性は明かであるが、同時に、二つの相違点を指摘しておかねばなるまい。

先ず第一には、五転阿字の内の第五の文字が相違している点である。『華嚴經疏』に示された五字は『大日經疏』に由来するものであり、その典拠は明らかである。しかし『祕藏記』の第五の文字、*amh*は何れに由来するものであるかはつきりしない。杲宝は「疏第十四云、又此阿有五種、阿、阿（長）、暗、惡、惡（長）。前者檀法中心是大日如來、即同此中阿字。今從阿字而更生四字、即是大慈胎藏之葉也。其噁（長聲）字一字是方便輪。所以中無也。此是釋迦佛輪也。」<sup>27</sup>と言い、その根拠を『大日經疏』に求めており、『大日經疏』からの引用である「其噁（長聲）字一字是方便輪。」は第五の文字を指しているであろうが、これは必ずしも*amh*に対応していない。それにもかかわらず、杲宝が『大日經疏』に根拠を求めたということは、それ以外に求めようもなかったという状況を示唆している。『祕藏記』の五転阿字に完全に一致する儀軌類は見当たらないようであるし、五字のうち四字は共通し、且

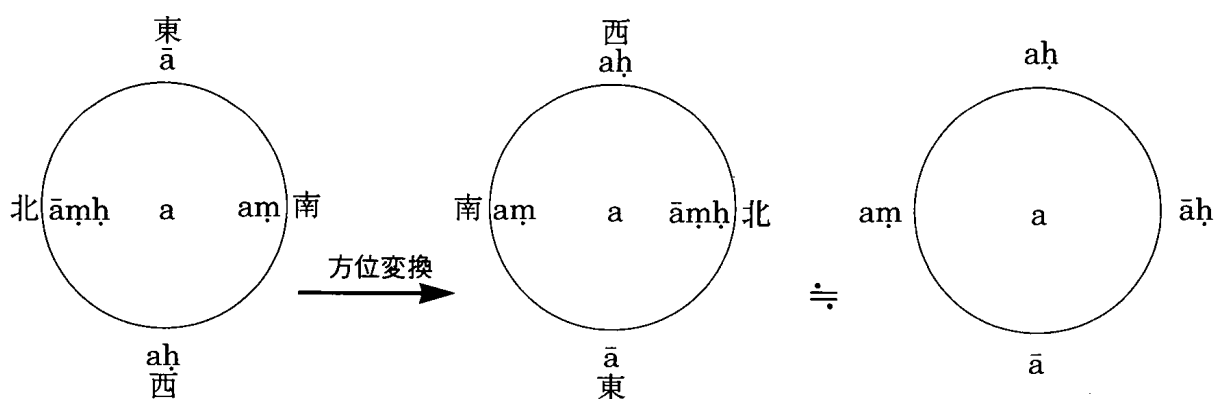


図 3

つ阿字より四字を出生するという構造を共に有しているわけであるから、ここでは、『祕藏記』の五転阿字は基本的には『大日經疏』に由来し、第五字の $\bar{a}h$ が $\bar{a}m\bar{h}$ に改変されたものとして一応に見做しておいたとしても齟齬は無いように思われる。

第二には、両者の四字の配列が相違している点である。しかし、澄観の示す五転阿字では下方より右回りに四字が配列され、『祕藏記』のそれは上方より右回りに配列されており、両者は起点に差異があるものの、右回りという点に於て共通している。また『祕藏記』では方角が示されており、この方位取りを金剛界曼荼羅の方位取りに乗っ取って変換すると、図3のようになり、澄観の言う五転阿字と極めて類似した形が顕れる。おおよそ両者の相違点を二点ばかり指摘してみたが、それは必ずしも両者を異質なるものと判断すべき根拠とはなりえず、寧ろ両者は極めて類似したものと見るのが適当との結論に至るのである。

さて、先にも既に述べたが、この五転阿字は『大日經疏』に基づくものであるにせよ、そこではただ阿字より四字が出生すると言うだけで、その配列については全く言及しておらず、配列に関してはその根拠を『大日經疏』に求められない。それでは、澄観が五転阿字の配列を明確に示しているということをどのように理解すべきであろうか。

『祕藏記』に典拠不明な五転阿字の配列が示されていることから、密教

では五転阿字の配列を確定しようという動向を窺うことができるわけであるが、仮に澄観がその配列を創作したと考えたとしても、彼の行為は相当に密教的であると言わねばなるまい。しかし、澄観が殊更に五転阿字の配列を創作せねばならないような状況は『華嚴經疏』からは読み取ることができず、澄観の全くの創作であるとは考えにくい。恐らくは、当時既に五転阿字の配列に関して一定の解釈が存在し、澄観はそれを聞き知していたと言うのが適当であろう。また、『祕藏記』の五転阿字の配列と親しく共通する点を有するということであれば、両者の配列法は同質の流れの上に在ると言え、時代的に先行する『華嚴經疏』に記録された五転阿字が雛形となり、その後改変を経つつ『祕藏記』に伝承された過程が想起されるのである。

このように見てくると、澄観は単に文献からの情報だけに依拠しているとは言えなくなる。また『祕藏記』は口伝の類の集成という性格を有しているとするならば、澄観は相当に深く密教と関わっていたのではないかとの予想がつくのである。

以上が所謂善無畏系の密教からの引用である。しかし、五転阿字の配置が金剛界立てで見るに『祕藏記』のそれと一致している点を鑑みるなら、それは純粋な善無畏系の密教ということではなく、ある程度不空系の影響下にあるそれと見る必要があるかもしれない。

### C 『金剛頂瑜伽理趣般若經』の用例

『金剛頂瑜伽理趣般若經』の引用は以下の箇所に見いだされる。

此中諸會不出文殊普賢。略有二門。一相對明表。二互融顯圓。今初、略明三對。一以能所相對。普賢表所依法界。即在纏如來藏故。理趣般若云、一切衆生皆如來藏。普賢菩薩自體遍故。<sup>(28)</sup>

入法界品の末会を概説している箇所にて、澄観は「二位統収」という項を設け、末会中の諸会は文殊と普賢により収め尽くされるとしている。彼は、一つに両尊は相對するという観点から、二つに両尊は円融するという観点から、両者の象徴する内容を説き明かし、諸会が文殊と普賢により尽くされる所以を明らかにしている。前者の観点は更に能所相對・解行相對・理智相對の三つの相對關係から論じられており、上掲の文は、その内の能所相對に関して述べている箇所に相当する。

澄観の言によれば、普賢と文殊はそれぞれ所依の法界（在纏如来藏）と能信の心、所起の万行と能起の解、所証の法界と能証の大智を象徴しているということであり、これにより入法界品末会に示される行位を網羅することができるのである。これに類似した考え方は法藏にも見られるが、例えば『探玄記』で「第三衆中亦三。謂一菩薩、二聲聞、三諸天王。初菩薩中亦三。謂一舉數、二列名、三歎德。名中先標上首二人。以其是助化主故。釋有三義。一普賢當法界門、是所入也。文殊當般若門、是能入也。表其入法界故。二普賢三昧自在、文殊般若自在。三普賢明廣大之義、文殊明甚深之義。深廣一對故標上首<sup>(29)</sup>。」<sup>(29)</sup>と言い、また「五攝二位者、此五十五會二主統收。初文殊至後文殊、是文殊位屬般若門。後普賢一位屬法界門。非般若無以入法界、是故善財創見於文殊。非入法界無以顯般若、是故善財終見於普賢。是故二人寄二位以明入法界<sup>(30)</sup>。」<sup>(30)</sup>と言い、澄観と同じく普賢と文殊を理と智に配当していることが確認されるが、法藏は四十二位を文殊位から普賢位への移行としてしか捉えておらず、四十二位全体に亘り各々普賢と文殊を相對させようとする澄観とは大きく異なっている。『宋高僧傳』澄観伝では「文殊主智普賢主理、二聖合爲毘盧遮那、萬行兼通即是華嚴之義也<sup>(31)</sup>」<sup>(31)</sup>という澄観の思想が紹介されており、また彼自身『三聖圓融觀』なる書を著していることから、普賢・文殊・毘盧遮那の三尊により『華嚴經』を捉えようとする態度が窺え、彼が法藏に基づきつつも、その内容が大きく相違する所以は、彼のこのような理解に由来するものと考えられる。

以上のように考えてみると、上掲の箇所は澄観に独自の思想を披歴した部分であり、且つそれは彼の思想にとって中核的位置に在り、そのような場面に於て彼は積極的に密教典籍を経証として取り上げたということになる。『金剛頂瑜伽理趣般若經』本文では「一切有情即是如來藏。普賢菩薩性遍故。」<sup>(32)</sup>とあり、ほぼ正確に引用がなされているが、極めて短く引用されている点を鑑みれば、『金剛頂瑜伽理趣般若經』の思想の援用までを考えていたかは疑わしく、自説にとって都合の良い部分だけを示しているようにも思われる。しかし、彼と密教の関わりを考える上では、彼が『金剛頂瑜伽理趣般若經』を披見し、それが経証に堪えうるものと認め、自らの思想にとって重要な箇所<sup>(33)</sup>に於て肯定的に引用している点は重視せねばならないだろう。

#### D 『金剛頂經釋字母品』の用例

『瑜伽金剛頂經釋字母品』の引用は以下の箇所に見いだされる。

今云多者、毘盧遮那經釋多云、如如解脱。金剛頂云、如如不可得故。謂如即無邊差別故、如不可得。<sup>(33)</sup>

これは先の『大日經疏』引用例Aと同じ箇所である。ここも先と同じく極めて短い文章が引用されており、その内容も「多字」に関することに限定されているため、内容的に問題なからう。具体的な「多字」の内容については表1を参照されたい。

ここでは『大日經疏』の説に続けて「金剛頂云」と述べ、二説を並記している。この「金剛頂」は金剛頂系の經典群全般を指しうるものとせねばならないが、当該の文章は『瑜伽金剛頂經釋字母品』にしか見当たらず、その本文では「多（上）字門一切法如如不可得故」<sup>(34)</sup>とあり、両者は完全に一致しているため、それを指示しているものと特定できる。

## E 『金剛頂超勝三界經說文殊五字眞言勝相』の用例

『金剛頂超勝三界經說文殊五字眞言勝相』の引用例としては以下の三箇所を挙げることができる。

a 列有四十二門。皆言般若波羅蜜門者、從字入於無相智故、字義爲門故。毘盧遮那經中皆言不可得。智無所得即般若故。又文殊五字經云、受持此陀羅尼、即入一切法平等、速得成就摩訶般若、纔誦一遍如持一切八萬四千修多羅藏。<sup>(35)</sup>

これは、先の『大日經』引用例cと同じ箇所の一文である。

『華嚴經疏』では「又文殊五字經云」以下にて『金剛頂超勝三界經說文殊五字眞言勝相』からの引用がなされているわけであるが、それは『金剛頂超勝三界經說文殊五字眞言勝相』本文の「若善男子善女人、有能持此眞言、纔誦一遍、即入如來一切法平等、一切文字亦皆平等、速得成就摩訶般若。」と「若人纔誦一遍、如誦八萬四千十二圍陀藏經。」<sup>(37)</sup>といった異なる箇所の文章を一つにまとめた形になっている。

『金剛頂超勝三界經說文殊五字眞言勝相』の場合、「此眞言」が「阿囉跋左曩」を指していることは明かである。この意味から『華嚴經疏』の引用文で言う「此陀羅尼」も文殊五字眞言を指すものと考えられる。しかし、『華嚴經疏』の当該の箇所は四十二門全体に対して言及されている箇所であり、四十二門全体を指して「此陀羅尼」と言っている可能性も有る。但しこの場合も、冒頭の五字は「阿囉波者那」<sup>(38)</sup>であり、そこには文殊の眞言が内包されており、且つそれを指して『金剛頂超勝三界經說文殊五字眞言勝相』の言を仮って陀羅尼の功德を謳っておれば、四十二門を文殊眞言として捉えているのだとも言える。

誦えるべき陀羅尼が四十二門全体であるのか、或いはその冒頭の五文字に限られるのは明瞭ではないが、「この陀羅尼を受持すれば一切法平等に入り、速やかに摩訶般若を成就する」と言い、また「纔に一遍だけでも誦えることをすれば、一切八万四千修多羅藏を持するに等しい」とさえ言い、この陀羅尼の功德をことの

## 澄観と密教（遠藤）

表 3

|    | 『華嚴經疏』                                              | 『金剛頂超勝三界經說文殊五字眞言勝相』 |
|----|-----------------------------------------------------|---------------------|
| b1 | 一阿者是無生義。以無生之理、統該萬法故。經云。無差別境而菩薩得此無生、則能達諸法空斷一切障。故云威力。 | 阿者是無生義。             |
| b2 | 二多者、彼經第二當囉字。是清淨無染離塵垢義。                              | 囉者清淨無染離塵垢義。         |
| b3 | 三波者、五字經云、亦無第一義諦、諸法平等。謂眞俗雙亡是眞法界。諸法皆等即是普照。            | 跋者亦無第一義諦諸法平等義。      |
| b4 | 四者者、諸法無有諸行。謂諸行既空故、遍摧差別。                             | 左者諸法無有諸行義。          |
| b5 | 五那者、諸法無有性相、言說文字皆不可得。謂性相雙亡故無所依。能所詮亡是謂無上。             | 曩者諸法無有性相說言文字皆不可得義。  |

ほか強調している。且つその陀羅尼は一遍だけでも相  
当の功德を得られるものであると言うのであるから、  
易行でありながら功德が甚大ということであり、これ  
は極めて実践的な内容を示しているものと言える。そ  
れ故、彼が敢えて行った『金剛頂超勝三界經說文殊五  
字眞言勝相』からの引用は、実践を伴わない空虚な言  
葉だとは到底思われない。つまり、澄観の陀羅尼の念  
誦者としての姿をここに垣間見ることができるのであ  
る。

b 一阿者は無生義。以無生之理、統該萬法故。經  
云、無差別境而菩薩得此無生、則能達諸法空  
斷一切障。故云威力。二多者、彼經第二當囉  
字。是清淨無染離塵垢義。三波者、五字經云、  
亦無第一義諦、諸法平等。謂眞俗雙亡是眞法  
界。諸法皆等即是普照。四者者、諸法無有諸  
行。謂諸行既空故、遍摧差別。五那者、諸法  
無有性相、言說文字皆不可得。謂性相雙亡故  
無所依。能所詮亡是謂無上。<sup>(39)</sup>

これは先の引用例 a に続いて示される部分である。『華嚴經疏』では、四十二門の各文字に解釈を施してゆくが、これはその内の冒頭の五文字に関する解釈である。『華嚴經疏』の引用と『金剛頂超勝三界經說文殊五字眞言勝相』本文との対応を示すと、前頁の表3のようにまとめられる。

『華嚴經疏』中では、第三の「波」字についてのみ『金剛頂超勝三界經說文殊五字眞言勝相』からの引用である旨を示しているが、両者の文章を対比してみると、五字全てに対して引用がなされていることに気づく。それは澄観自らの解釈の言に織り込まれる形で示されているが、正確に『金剛頂超勝三界經說文殊五字眞言勝相』の文章が反映している。

ここで注目したいのは、第二の「多」字が「囉」字に読み替えられている点である。文中の「彼經」とは、次に検討する『大方廣佛華嚴經入法界品四十二字觀門』（以下『四十二字觀門』）のことであり、『華嚴經』の四十二門の冒頭が「阿多波者那」で始まるのに対し、そこでは「阿囉跛左曩」の五字より始まっているということである。澄観は『華嚴經』で第二字を「多」とするのは誤訳であり、「囉」字とすべきであると主張しているのであるが、その理由が「多字と囉字は字形が似ていて、その音を取り違えた<sup>(40)</sup>」と言うのみである。このような理由であれば、澄観の言うように『華嚴經』が誤訳したという可能性だけを指摘すべきではなく、同時にそれとは逆に『四十二字觀門』が誤訳する可能性も指摘せねばならない筈なのに、彼は『華嚴經』ではなく『四十二字觀門』を専ら信用している。となると、翻訳の信憑性に重きを置いて『四十二字觀門』を選択したということではなく、寧ろ「然初五字若準阿目佉三藏、即全是文殊眞言。若準今本、而第二一字不同。今依彼經釋之。」<sup>(41)</sup>に彼の本音を求められそうである。つまり、彼はどうしても四十二門に文殊眞言を読み込みたかったのである。彼のこの意欲が先のような曖昧な理由をかってでも、『華嚴經』ではなく『四十二字觀門』に依拠してゆく方向に向かわせたのである。

c 又云、以那字無性相故、者字無有諸行、者字無有諸行故、跛字無第一義、跛字無第一義故、囉字無塵垢、以囉字無塵垢義故、阿字法本不生、以阿字法本不生故、那字無有性相。汝知是要。當觀是心本來清淨無染無著、離我所分別之相。<sup>(42)</sup>

これも先の引用例bに続いて示された部分である。ここでは文殊五字真言の各文字が互いに連携し、那字↓者字↓跛字↓囉字↓阿字という具合に理論的に連続し、その阿字が再び那字に接続するのだという。『金剛頂超勝三界經說文殊五字真言勝相』本文でも「以曩字無有性相故、左字無有諸行。以左字無諸行故、跛字無第一義諦。以跛字無第一義諦故、囉字無有塵垢。以囉字無有塵垢故、阿字法本不生義。善男子當觀是心本來清淨無所染著、離我所分別之相。」<sup>(43)</sup>と言っており、その引用はほぼ正確になされ、文意も正しく継承されている。

ここで注意しておきたいのは、澄観の引用が単に五字の理論的連環の箇所限定されず、続けて「汝知是要。當觀是心本來清淨無染無著、離我所分別之相。」という部分も併せて引用されている点である。両者の文章を対照すると、澄観は經の「善男子」という語の代わりに「汝知是要」という語を挿入しており、読者に「文殊五字真言の要を知れ」と呼びかけているようにも理解でき、先の引用例aの場合と同様に、この引用文にも密教の実践的な色彩が見いだされてくるのである。

#### F 『大方廣佛華嚴經入法界品四十二字觀門』の用例

『華嚴經疏』<sup>(44)</sup>に於ける『四十二字觀門』<sup>(45)</sup>からの引用は次の箇所に見いだされる。引用の範囲は諸字に亘るため、便宜上予め引用文と『四十二字觀門』本文とを対応させて示すことにしよう。表にまとめると表4が如

|                                                                            |                                                        |
|----------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------|
| 叉字即 <u>盡性</u> 。                                                            | 訖灑（二合）字時、入決擇息諸業海藏般若波羅蜜門。悟一切法 <u>窮盡性</u> 不可得故。          |
| 娑多字即 <u>任持處非處令不動性</u> 。惑障為非處。開淨光明為其處。                                      | 娑多（二合上）字時、入摧諸煩惱清淨光明般若波羅蜜門。悟一切法 <u>住持處非處令不動轉性</u> 不可得故。 |
| 壞字即 <u>能所知性</u> 。                                                          | 孃（輕呼上）字時、入生世間了別般若波羅蜜門。悟一切法 <u>能所知性</u> 不可得故。           |
| 曷攞多字即 <u>執著義性</u> 。執著為生死境。義即智慧輪。                                           | 囉他（二合上）字時、入逆生死輪智道場般若波羅蜜門。悟一切法 <u>執著義性</u> 不可得故。        |
| 婆字即可 <u>破壞性</u> 。圓滿之言、不空譯為道場。然此婆字宜蒲餓反。諸本多云蒲我。則與第八不殊。                       | 婆（引去）字時、入一切宮殿道場莊嚴般若波羅蜜門。悟一切法 <u>可破壞性</u> 不可得故。         |
| 車字即 <u>欲樂覆性</u> 。                                                          | 磋（上）字時、入修行加行藏蓋差別道場般若波羅蜜門。悟一切法 <u>欲樂覆性</u> 不可得故。        |
| 娑麼字即可 <u>憶念性</u> 。                                                         | 娑麼（二合）字時、入現見十方諸佛旋般若波羅蜜門。悟一切法 <u>可憶念性</u> 不可得故。         |
| 訶婆字即可 <u>呼召性</u> 。無緣召令有緣故。                                                 | 訶嚩（二合）字時、入觀察一切衆生堪任力遍生海藏般若波羅蜜門。悟一切法 <u>可呼召性</u> 不可得故。   |
| 縵字即 <u>勇健性</u> 。                                                           | 哆娑（二合）字時、入一切功德海趣入修行源底般若波羅蜜門。悟一切法 <u>勇健性</u> 不可得故。      |
| 伽字即 <u>厚平等性</u> 。                                                          | 伽（去）字時、入持一切法雲堅固海藏般若波羅蜜門。悟一切法 <u>厚平等性</u> 不可得故。         |
| 吒字即 <u>積集性</u> 。                                                           | 姤（上）字時、入願往詣十方現前見一切佛般若波羅蜜門。悟一切法 <u>積集性</u> 不可得故。        |
| 拏字即 <u>離諸諍諍無往無來行住坐臥</u> 。謂以常觀字輪故。                                          | 摩（上）字時、入字輪積集俱胝字般若波羅蜜門。悟一切法 <u>離諸諍諍無往無來行住坐臥</u> 不可得故。   |
| 娑頗字即 <u>遍滿果報</u> 。                                                         | 頗字時、入成熟一切衆生際往詣道場般若波羅蜜門、悟一切法 <u>遍滿果報</u> 不可得故。          |
| 娑迦字即 <u>積聚蘊性</u> 。                                                         | 塞迦（二合上）字時、入無著無碍解脫地藏光明輪普照般若波羅蜜門。悟一切法 <u>積聚蘊性</u> 不可得故。  |
| 也娑字即 <u>衰老性相</u> 。                                                         | 也娑（上二合）字時、入宣說一切佛法境界般若波羅蜜門。悟一切法 <u>衰老性相</u> 不可得故。       |
| 室者字、即 <u>聚集足跡</u> 。謂聚集即一切衆生。法雷即是足跡。                                        | 室左（二合上）字時、入一切虛空以法雲雷震吼普照般若波羅蜜門。悟一切法 <u>聚集足跡</u> 不可得故。   |
| 佗字即 <u>相驅迫性</u> 。謂無我曉之、即為驅迫。                                               | 吒（上）字時、入無我利益衆生究竟邊際般若波羅蜜門。悟一切法 <u>相驅迫性</u> 不可得故。        |
| 陀字即 <u>究竟處</u> 。所謂此究竟處含藏一切法輪。然新譯乃是茶字。去聲引之。                                 | 茶（引）字時、入法輪無差別藏般若波羅蜜門。悟一切法 <u>究竟處所</u> 不可得故。            |
| 上來從娑上字來、皆上有悟一切法、下有不可得言、今並略之。若具皆如瑟吒字耳。其中難者已釋。餘以經疏相對文並可知。更有對會及修觀儀所得功德。並別章具也。 |                                                        |

## 澄觀と密教（遠藤）

表 4

| 『華嚴經疏』                                   | 『大方廣佛華嚴經入法界品四十二字觀門』                      |
|------------------------------------------|------------------------------------------|
| 六邏字。悟一切法離世間故、愛支因緣永不現故。離世故無依。愛不現故無垢。      | 攞字時、入無垢般若波羅蜜門。悟一切出世間故。愛支因緣永不現故。          |
| 七陀字。悟一切法調伏寂靜。眞如平等無分別故。方爲不退轉方便。           | 娜字時、入不退轉加行般若波羅蜜門。悟一切法調伏寂靜眞如平等無分別故。       |
| 八婆字。悟一切法離縛解故。方入金剛場。                      | 麼字時、入金剛場般若波羅蜜門。悟一切法離縛解故。                 |
| 九茶字。悟一切法離熱熾穢得清涼故。是普摧義。                   | 拏（上）字時、入普遍輪般若波羅蜜門。悟一切法離熱熾穢得清涼故。          |
| 十沙字。悟一切法無礙故。如海含像。                        | 灑字時、入海藏般若波羅蜜門。悟一切法無罣碍故。                  |
| 嚩字。悟一切法言語道斷故。能遍安住。                       | 嚩字時、入普遍生安住般若波羅蜜門。悟一切法言語道斷故。              |
| 哆字。悟一切法眞不動故。不動則圓滿發光。                     | 多（上）字時、入照曜塵垢般若波羅蜜門。悟一切法眞如不動故。            |
| 也字。悟如實不生故。則諸乘差別積聚皆不可得。                   | 野字時、入差別積聚般若波羅蜜門。悟一切法如實不生故。               |
| 瑟吒字。悟一切法制伏任持相不可得故。普光明即能制伏。任持煩惱即所制伏。息即伏羲。 | 瑟吒（二合上）字時、入普遍光明息除熱惱般若波羅蜜門。悟一切法制伏任持相不可得故。 |
| 迦字。悟作者不可得則作業如雲。皆無差別。                     | 迦（上）字時、入差別種類般若波羅蜜門。悟一切法作者不可得故。           |
| 娑上字即時平等性。                                | 娑（上）字時、入現前降（雨/注）大雨般若波羅蜜門。悟一切法時平等性不可得故。   |
| 麼字。即我所執性。我慢高舉若衆峰齊峙。我慢則生死長流湍馳奔激。          | 莽（輕呼）字時、入大迅疾衆峰般若波羅蜜門。悟一切法我所執性不可得故。       |
| 伽字即一切法行取性。                               | 譏字時、入普遍輪長養般若波羅蜜門。悟一切法行取性不可得故。            |
| 他字。即是處所性。                                | 他（上）字時、入眞如無差別般若波羅蜜門。悟一切法處所不可得故。          |
| 社字即能所生起。                                 | 惹字時、入世間流轉窮源清淨般若波羅蜜門。悟一切法能所生起不可得故。        |
| 鎖字即安隱性。                                  | 娑嚩（二合）字時、入念一切佛莊嚴般若波羅蜜門。悟一切法安隱性不可得故。      |
| 陀字。即能持界性。                                | 駄字時、入觀察法界道場般若波羅蜜門。悟一切法能持界性不可得故。          |
| 奢字即寂靜性。                                  | 捨字時、入隨順一切佛教般若波羅蜜門。悟一切法寂靜性不可得故。           |
| 佉字即如虛空性。                                 | 佉（上）字時、入現行因地智慧藏般若波羅蜜門。悟一切法如虛空性不可得故。      |

きである。

これは先のE『金剛頂超勝三界經說文殊五字眞言勝相』の引用例cに続いて示された部分である。ここでは第六字より引用を始めているが、それは先の五字に続いて第六ということである。先の五字は前の『文殊五字經』の項に入れたが、四十二字門に於けるその五字の順番はこの『四十二字觀門』に則るものであり、その意味ではこちらの項に収めるべきかもしれない。しかしその解釈は『文殊五字經』に依るものであり、『四十二字觀門』は四十二字門に於ける冒頭の五字の順序という範囲での依拠であるから、ここでは五字について再説しない。

表のごとく両者を対照すると、澄觀も引用の末尾にて断っているように、『華嚴經疏』は『四十二字觀門』を要約しながら引用している。そこでは「上來從娑上字來、皆上有悟一切法、下有不可得言、今並略之。若具皆如瑟吒字耳。」と言い、娑上字以後については、正しく引用するなら、「瑟吒字」にて「瑟吒字、悟一切法制伏任持相不可得故」とあるように、例えば娑上字について言えば、「娑上字即悟一切法時平等性不可得」という具合になるとしている。しかし、『華嚴經疏』の「縫字」乃至「也娑字」も同様に「悟一切法」「不可得」を欠しており、「迦字」も「不可得」が付されていても「二切法」を欠しており、これらの用例については言及されていないことになるが、これらは例外ということではなく、恐らくは娑上字以後と同様に「悟一切法」「不可得」を付すべきなのであろう。

さて、澄觀は以上のように、諸字の一々に解釈を施すなどして、四十二門解釈に大きく紙幅を割いているが、このことは彼の私淑する法藏の場合と大きく異なる。法藏の『探玄記』では四十二門について「二唱阿字時下別顯四十二門。初唱阿字時入般若門名威德等者、梵語威德名阿答摩、是故唱世阿字時便即轉入般若威

徳。以阿聲同故。即此得彼以爲難故。餘門並皆多悉如是准釋可知。<sup>(46)</sup>と極めて簡潔に述べているにすぎない。法蔵によれば、「阿字を唱えることにより、威徳という名の般若門に入る」のは、「威徳は梵語で「阿答摩」であり、その「阿答摩」の頭文字である「阿」を唱えることで般若威徳に転入するのだ」としている。且つ「その他の門は並びに何れも多くの場合、このようなのである。准釈して知るべきである。」とあるから、その他の字についても般若門の名の梵語の頭文字を唱えるやり方が適用されているということになる。それに対して澄観の場合は、先のE『金剛頂超勝三界經說文殊五字眞言勝相』の引用例に引き続き、この『四十二字觀門』により『華嚴經』の四十二門が解釈されており、彼は四十二門を徹底して密教的に解釈しているのである。澄観は慧苑に対して法蔵教学からの逸脱を厳しく批判しているが、彼の行った四十二門の密教化も一種の逸脱とも見れる。それでも彼自身はこの密教化を逸脱とは考えていないということであるから、寧ろ不空の新訳により法蔵の思想が一層充実したものとなったということなのであろう。

## 結 論

以上、『華嚴經疏』に引用された密教典籍六種、計十二例を概観してきたが、『大日經』引用例a及び『金剛頂瑜伽理趣般若經』からの引用以外は全て『華嚴經』の四十二門に関する解釈に向けられていることが確認された。このことから、澄観の密教援用の意図は、主に四十二門解釈に在ったと結論付けられる。

『華嚴經疏』に於ける四十二門解釈は、字輪の意義について従来の法蔵説を示しながら、『大日經』による解釈を専ら宣揚し、以後、字輪は完全に密教的な理解の元で語られる構図となっている。しかも澄観は『華嚴經』本文に即して諸字を解釈することはせず、『四十二字觀門』により読み替えてその解釈に充当しており、

『華嚴經』の四十二門は完全に密教化されたこととなった。このことは単に、極めて簡潔に述べるにすぎなかった法蔵釈を補完しようというような、解釈学上の興味というだけではなく、E『金剛頂超勝三界經說文殊五字眞言勝相』の引用例で見られるように、その言葉は実践と緊密に結びついているのである。また、このことは単に文殊五字眞言に限って考えられることではなく、四十二門解釈の末に「更有對會及修觀儀所得功德。並別章具也。」<sup>47</sup>とあり、これは字輪觀に関わる具体的な内容について指示しているものである。と言え、そこで「修觀儀」が挙げられているのであるから、密教化された四十二門全般が実践に向けられた性格のものと考えられるのである。実に密教典籍の引用の周辺を子細に探ると、そこに密教実践者（字輪觀の行者・文殊五字眞言の念誦者）としての澄觀の姿がほめかされているのである。

このように、実践的な密教化された四十二門全般を彼が重視していることにもとより疑いは無いが、その中でも冒頭の五字に相当の紙幅を割いており、四十二門の中でもそれらを特に重視していたことが窺える。澄觀は、『華嚴經』本文の冒頭の五文字「阿多波者那」を『四十二字觀門』でいう「阿囉跛者囊」に読み替えることにより、それを文殊五字眞言であると断定し、その甚大なる功德を謳っている。文章上の解釈の流れからすれば、そのように『四十二字觀門』による変換が先行し、その変換を俟って『金剛頂超勝三界經說文殊五字眞言勝相』を援用するといった手順になるのであるが、『華嚴經』読み替えの動機は四十二門を文殊五字眞言として扱おうとする点に在り、この観点からは『金剛頂超勝三界經說文殊五字眞言勝相』が『四十二字觀門』に先立つこととなる。つまり、四十二門の密教化の背景には五字文殊に対する彼の思い入れを十分に勘案しておく必要があるということなのである。

もう一点、澄觀と密教の関係を考える上で注意すべき点は、『大日經疏』引用例b5の項で見た如く、澄觀の密教の知識が文献だけに由来するものではなく、口伝的内容を見聞しているということである。口伝的内

## 澄観と密教（遠藤）

容は必ずしも厳密な師資相承のような性格を有するものではないにせよ、少なくとも、その内容は極めて密教に内的な問題に関わる内容であり、体系的に密教を修めた人物との接触、或いは密教道場への訪問といった、密教に大変近い環境に澄観が身を置いた可能性を示唆しているものと考えられるのである。

それでは、澄観は如何に密教と邂逅を果たしたのであるうか。本論の結果を踏まえ考察してゆくことにしたいが、これについては更に『大方廣佛華嚴經隨疏演義鈔』の検討を経て、他日改めて論じることになしたい。

## 註

- (1) 「宋遼時代の密教」(『密教研究』第三十八号所収)
- (2) 「空海と澄観 真言と華嚴の關係」(『印度學佛敎學研究』四四―一所収)
- (3) 大正蔵卷三五 九二六中
- (4) 大正蔵卷十八 四十上
- (5) 大正蔵卷三五 九二七上
- (6) 大正蔵卷十八 三十中
- (7) 大正蔵卷三九 七二二下
- (8) 大正蔵卷三五 九五三上
- (9) 大正蔵卷十八 十上・中
- (10) 大正蔵卷三五 九五三中
- (11) 澄観は第二の字門は多字門ではなく囉字門を誤訳したものと見てるので、或いは多字門ではなく囉字門を指示している可能性も有る。しかし『華嚴經』では第六の字門として囉字門を挙げており、『華嚴經疏』もここではそれに即して解釈しているので、五字門中の第二の字門は囉字門ではなく多字門を指示するものとして

見るのが宜しいだろう。

- (12) 大正蔵卷十 四一八上
- (13) 大正蔵卷十八 十上ノ
- (14) 大正蔵卷三五 九五三上
- (15) 大正蔵卷三九 六五二中
- (16) 大正蔵卷三九 六五四上
- (17) 大正蔵卷三五 九五三上
- (18) 大正蔵卷十八 十中
- (19) 大正蔵卷三五 九二七上・中
- (20) 大正蔵卷三九 七二二下
- (21) 増補改訂日本大蔵經 第八四卷 一一二下
- (22) 那須政隆『秘蔵記講伝(一)』(成田山仏教研究所紀要2)
- (23) 『秘蔵記』成立考』(『密教学研究』第十五号所収)
- (24) 『秘蔵記』の選述年代について』(『密教学研究』第二十四号所収)『秘蔵記』の成立年代再考』(『印度學佛教学研究』四七一・二所収)
- (25) 『秘蔵記』解説(『定本弘法大師全集』第五卷所収)
- (26) 『秘蔵記』の成立年代』(『密教文化』第一八六所収)
- (27) 増補改訂日本大蔵經 第八四卷 二〇一上・下
- (28) 大正蔵卷三五 九一八上
- (29) 大正蔵卷三五 四四一下ノ四四二上

## 澄観と密教（遠藤）

- (30) 大正蔵卷三五 四五一上
  - (31) 大正蔵卷五十 七三七中
  - (32) 大正蔵卷八 七八〇中
  - (33) 大正蔵卷三五 九五三上
  - (34) 大正蔵卷十八 三三八下
  - (35) 大正蔵卷三五 九五三上
  - (36) 大正蔵卷二十 七〇九中
  - (37) 大正蔵卷二十 七〇九上
  - (38) 『華嚴經』本文では「阿多波者那」とあるが、澄観は「阿囉波者那」と解している。
  - (39) 大正蔵卷三五 九五三上
  - (40) 「囉多二字字形相近、聲相濫故。」（大正蔵卷三五 九五三上）とある。
  - (41) 大正蔵卷三五 九五三上
  - (42) 大正蔵卷三五 九五三上
  - (43) 大正蔵卷二十 七〇九中
  - (44) 大正蔵卷三五 九五三中・下
  - (45) 大正蔵卷十九 七〇八
  - (46) 大正蔵卷三五 四八五上・中
  - (47) 大正蔵卷三五 九五三下
- 【キーワード】澄観、不空、五字文殊、五転阿字